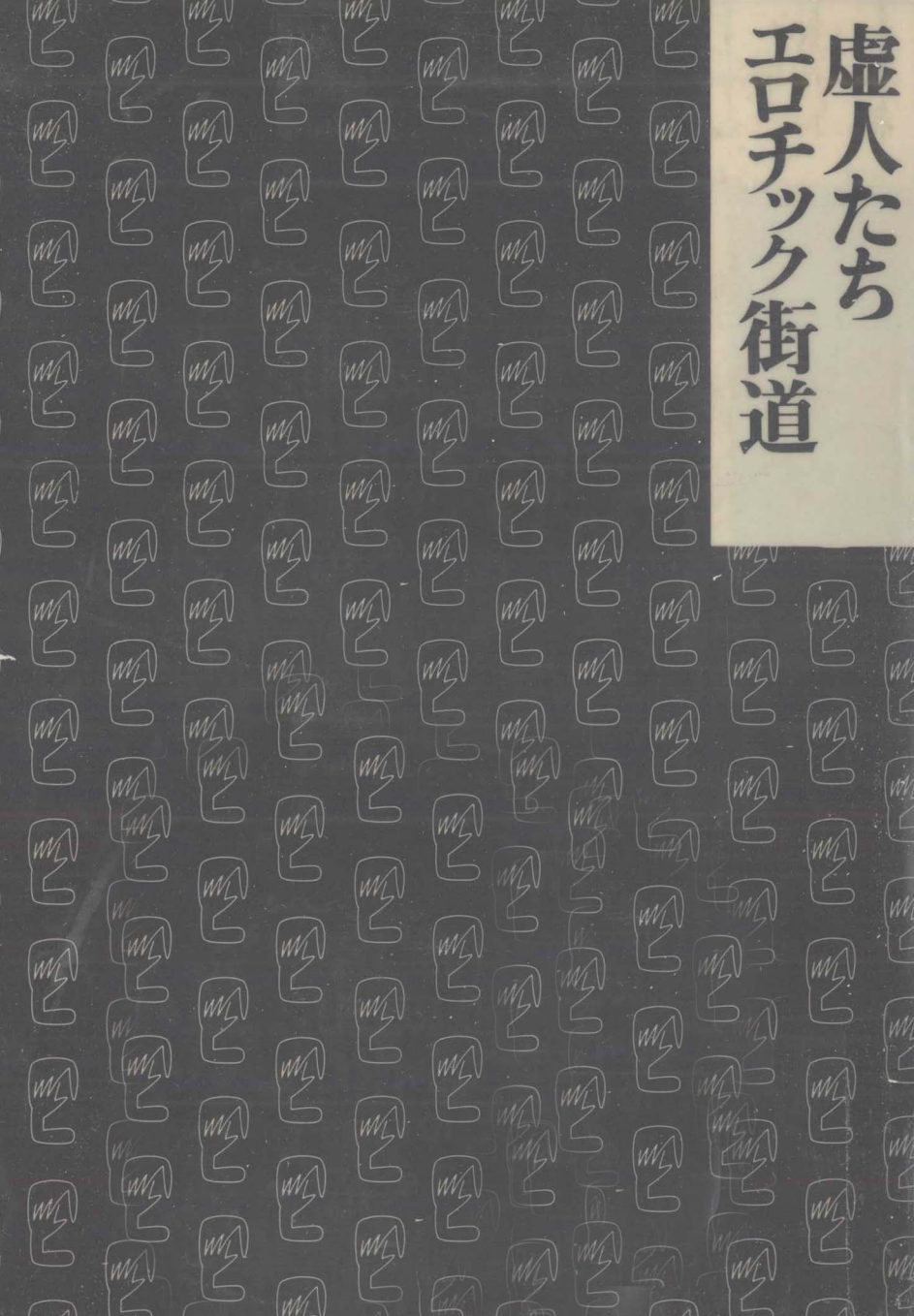


虚人たち

エロチック街道





筒井康隆全集 23

虚人たち
エロチック街道

新潮社

きょじん かいどう
虚人たち・エロチック街道



筒井康隆全集 第23巻

昭和六十年 二月二十日 印刷
昭和六十年 二月二十五日 発行

定価一五〇〇円

著者 筒井 康隆

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一(千一六二)

電話 業務部 東京(〇三)二六六・五一一

編集部 東京(〇三)二六六・五四一一

振替 東京 四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

© Yasutaka Tsutsui 1985 Printed in Japan

日本音楽著作権協会(出)許諾8462173-401号

ISBN 4-10-644423-2 C0393

筒井康隆全集第二十三卷・目次

長篇

虚人たち……………7

戯曲

三月ウサギ……………153

短篇

遠い座敷……………211

インタヴュー……………219

寝る方法……………224

旦那さま留守……………232

急流……………245

冷水シャワーを浴びる方法……………254

歩くとき……………255

遍在……………263

昔はよかったなあ……………269

かくれんぼをした夜……………272

ジャズ大名……………278

時代小説……………297

解説

一口ことば	傾斜	一について
.....		
318	317	312

奥野健男

346

日本古代SF考	エロチック街道
.....	
337	321

虚人たち・エロチック街道

装
幀

山
藤
章
二

長
篇
虚
人
た
ち

今のところまだ何でも彼は何もしていない。何もしていないことをしているという言いまわしを除いて何もしていない。窓の外は晴れている。いや。曇っているかもしれないがその保証はない。なにしろ雨が降っているかもしれないから。それでもやっぱり晴れているのかもしれない。窓ガラスが時おり光るのは太陽の光なのかもしれないが横なぐりに吹きつけてくる雨滴が何かの灯火に照らされているのかもしれない。雪明かりなのかもしれない。それどころか晴天と曇天と雨天がそんなことはあり得ないとする日常的思考を否定したり嘲笑したりするために数秒置きのくり返しを演じているのかもしれないではないか。そう考えてこそもしそれが雪明かりだとすれば雪明かりがちらつくなどという非日常性も納得できようというものだが彼はあいにくそんなことを納得する気すらない。確かなことは屋外の天気は不明であると彼が判断するための窓ガラスがそこにあるということだけだ。屋内にいる彼は何もしていないし窓の外の天気を見定めようと眼を凝らしているでもない。窓ガラスだけが彼に彼が屋内にいることを教えてくれている。そこは彼の家である。彼はそれを知っているし家の外の天気は今の彼に無関係であるということも心得ている。だが彼にとって現在の天気が晴れているか曇

っているか雨であるかがどうでもいいのと同じ程度には家の中の様子がどうでもよくはないのだ。そこが彼の家である限り家の中の様子は彼という人物を格づけするものであり彼の同居人がもしいるとすればその人物を想像させるものでもあるからだ。だから彼は家の中の様子をせめて窓の外が晴天か曇天か雨天かがわかる程度にわかっているなければならない。彼は屋内を見まわした。柱時計がある。針が六時六分を指しているその文字盤はローマ数字だ。振子がついている。アンティーク・ブームに乗った新品などではなく本ものの古時計である。座敷は八畳の間で床の間がある。山水画の掛軸は汚れている。それがどんな山水画かよくわからないのは汚れているせいかもしれないがそれも汚れていなくてさえよくわからない山水画だったのかもしれないし山水画という字が書かれているだけという可能性さえある。障子も襖も汚れている。簾たんすも古い。その座敷内にある家具のうちでの新品はテレビだけだ。新品であるが故にそのテレビは無個性でその無個性さたるやたとえばそれがXT三十四Ⅱ型であろうとVCE六〇〇九ⅠA型であろうと無個性であることに変わりはないほどだ。テレビの画面は何も映し出していない。青っぽく光っているだけだ。いや。何かが映りはじめた。彼はそれを今まで八畳間の中央に座ってじっと見ていたのだ。テレビの画面に映し出されているものはもちろんテレビ番組だ。音楽番組か

もしれないしドラマかもしれないしニュースかもしれないがそのうちのどれでもないかもしれない。はつきりしているのはテレビ番組であることだけだ。それがもしテレビ番組でなければ彼が今までテレビ番組を見ていたことにならないうし彼はそれを画面に映っている色彩や形が単にこれはテレビ番組であるとしか表現していないことによつて知ることができたのだ。その彼は洋服をきちんと着て正座をしている。帰つてきたばかりなのかもしれないし外出しようとしているのかもしれないがそのどちらか以外ではない。正装しているからだ。しかし彼は疲れていて空腹だ。帰つてきたばかりなのだと彼は思う。きつと帰つてきたばかりなのだそうに違ひないのだと思ひ外出はしないでおこうと彼は思う。したがつて今は夕方の六時六分なのだ朝の六時六分ではないのだと彼は確信する。いや。もう六時七分になつた。朝の六時七分にこんなに疲れていて空腹である筈はないのだと彼は自分にそう言い聞かせる。彼は自分の中に保守性の臭氣を嗅ぎとる。それは今のところまだかすかだ。彼は立ちあがつた。座敷を出た。廊下は両側がゾラコートを吹きつけた壁ではさまれていてうす暗い。壁のスイッチをひねろうとした彼はもしスイッチをひねつて電燈が点かなかつた場合のことを知らずしらず予想し自分が心の準備をはじめていることに気づく。そんなことを考えてはいけなひのだと思ひながらスイッチをひねるとあたり前

だと言いたげに廊下の電燈が点く。塩地と思える洋風のドアを開くと中は寝室で部屋の奥に布団の整えられたベッドがふたつ並んでいる。手前には三面鏡があり鏡台には女性化粧品の瓶が並んでいる。倒れている瓶もある。女の同居人がいてそれは妻だと彼は思う。妻の名前は現実には絶対にあり得ぬ運子珍子万子その他をひつくるめたすべての女性用固有名詞のどれであつても不思議ではない。寝室の電燈をつけ三面鏡を開くと彼の顔が映つた。眼鏡も髭も白髪もない中年男の顔だ。肥つてもいづ瘦せてもいづ傷痕も吹出物もない。あるのは眼鼻立ちだけだ。彼が自分の顔を見るのはこれが最初だがこの鏡に自分の顔を映して眺めたことは数知れぬほどである。ただ単に顔立ちだけしかないその顔を見て彼は自分を知ろうと努め鏡の中の自分にその成果が反映することによつて彼はますます彼になつていく。ベッドも三面鏡もその特徴を言いあらわせるほどの古いものではないことがわかつて彼はまた自分の保守性を感じる。鏡の中の顔が示す年齢を見てそれも無理はないと思ひむしろ自分が座敷にある古い家具類をそのままにしているのは貧乏のせいでもなければ浮わつた懐古趣味でもないと思ひ彼は幾分かはそれが誇らしい。廊下のつきあたりは食堂と台所で部分的に改装のあとがあつて改装されていない部分を含めていづれも洋風だ。新しいものは食堂のテーブル・クロスでありいちばん古そうなのは台所中央の調理

台だがそれすらさほど古いものではない。食堂の壁のま新しい皿時計は停っていた。食事の支度はまったく出来ていない。電気釜の中では五合ほどの米がまだ水に浸ったままだし鍋も出ていない。米の量で妻以外にも同居人がいるらしいことを彼は知る。買物籠の中には財布があった。財布の中には一万三千円と硬貨が十枚ほどある。妻の姿が見えないのは買物に出かけたからではないらしいと悟り彼は空腹を思い出して腹を立てる。妻またはその他同居人の姿を求めて彼はどことなく生活の匂いのない自分の家の中をさまよう。便所には臭気がなかった。大声で名前を呼ぶことさえできないその同居人のうちのひとりが自分の妻であることにも腹が立つ。まさか妻と連呼するわけにもいかないしただのおいでは間が抜けていて妻の名を知らぬ自分がみじめになるだけだ。厳密には同居している女が自分の妻だと認証されたわけですらない。口惜しいことには瞬間瞬間に自分や周囲を見出して行かねばならぬそんな環境を彼は理解しているし現にそこに棲息しているのだ。やがてさつき座っていた座敷の障子の裏側にある階段を彼は発見する。両側の壁が落ちていて靴下を穿いていてさえ足の裏に土のざらつきの感じられる階段を彼は二階へあがった。廊下の片側は手摺り越しのガラス戸で雨戸はまだ閉められていず片側には和室をわざわざ洋間に改造したらしい部屋がふたつ並んでいる。襖を嵌め殺しにして濃緑色のビニ―

ルの壁紙を貼っているのだ。そのような乱暴な改造に対して自分の中に違和感があるのかないのかもよくわからないがとりあえずはないか順応したかどちらかなのであるうと彼は納得しなければならぬ。手前のドアには貼り紙がしてありマジック・インキで書かれたその字はひどく稚拙である。

入室厳禁・目下虚構中

こんなことをわざわざ書かなくてもわかりきったことなのにと彼は思う。同居人のひとりにはあきらかに子供だ。当然自分の子供であらうと彼は思ってみる。男の子の字だ。年齢はよくわからないが小学校低学年ではないだろうし彼自身の年齢から考えればすでに大学を卒業しているということもあり得ない。自分の息子がもし高校生か大学生でこの字の稚拙さに相応しい人格を持っていたらと想像し彼は寂寞感に襲われる。室内で鈍い音がし次いでちゃんという小さなガラス食器を叩くような音がした。それはただそこに人がいることを彼に教える為だけの音ではなくあきらかに彼とは無関係な音だ。誰かを下宿させているのかもしれないと彼は思いついた。そう考えれば今の音の性格を首肯できるのだ。思わず周囲の様子を見まわすとあたりはさりげなく存在する。さりげなくここに在るぞと言うかの如くさりげない。奥のドアは半開きのままだ。室内は薄いブルーと

うすいピンクを基調にしたキャンディ・トーンで乱れたベ
ッドのすそにグリーンの柔らかな子熊。窓ぎわには枯
れたドライ・フラワー。壁には男性歌手らしい産毛の生え
た青年のポスター。ブレイヤーその他小型のステレオ・セ
ット。レコード立て。勉強机と椅子があり椅子には大柄な
花模様の赤いクッション。批評を拒否し若い娘の部屋とし
て典型でありすぎることを指摘されることさえ拒んでいる
ような部屋である。彼は机の前に立ち本立てを一瞥する。
大学受験用の各科目の参考書に混り赤い合成皮革の表紙に
よって秘密めかされた日記がある。取り出して開くと細い
ペンで横書きの女文字。見えない。字がにじんでいる。い
や。細字であることがわかるくらいだからにじんでいるの
ではない。ぼやけているのでもない。何が書いてあるかが
わからないだけだ。彼の眼が悪いのではない証拠に一部分
だけははっきりと読み取ることができる。

「兄は嫌い」「父はまた」「と会社で何かいやなこ」「田を
母に貰」

勉強机に備えつけの眼ざまし時計は六時十一分である。
なぜ高校生の娘までがこんな時間に家にいないのだと彼は
思う。父親としての当然の心配というにはあまりにも腹立
ちの度合いが大きいので彼はまた空腹を思い出す。だが突
然彼はごく一般的には環境や人間以前に事件が存在する筈
であることを悟った。とすれば彼の空腹度の進行と同時に

事件も進行しているのだから彼の空腹は当分満たされない
ことになる。空腹に対するやりきれなさまでがどんどん進
行するままでもはや開始された事件の進行に身を委ねると
いった不用意なことが許されてよいものか。しかし現実と
はそのようなものであるらしい。あらゆる環境下における
他人にとつての現実にもそのようなことがあり得る以上彼
にとつてもそういう現実はあると思わねばならない。たと
え彼の空腹が事件の滑らかなまたは複雑な経過または進行
の障害となつてもだ。彼は階段をおりた。階段をおりた正
面に玄関の間があることをもうそろそろ今さらながらとつ
け加えるべきかとも思いつつ彼は知る。そこは二畳の間で
三和土はさらに狭い。玄関のガラス戸のいちばん下の部分
がわれていてガラスの破片が三和土に散らばっている。そ
れらガラスの破片の表面に光はない。やはり妻と娘の不在
は事件の予兆であつたのかと彼は思い知る。屋外から足で
蹴破つたに違いないのだ。三和土には靴がある。何足かあ
る。うち一足はあきらかに彼の靴である。してみれば彼が
外出から帰つたとされる時間そのガラスの破片はすでにそ
のあたりに散らばつていたのであろう。なぜその時彼がそ
れに気づかなかつたことになつていいのか。彼が事件に遭
遇する以前のことはどうであつてもよいのだらうか。彼は
靴を穿いてガラス戸を開け屋外に出た。屋内にいた時の彼
へ義理立てでもするかのように天気は執念深くまだ明らか

ではない。晴れてもいず雨でもない。天気そのものが存在しない。強いていえば虚空に天気無用の巨大な判をべったり捺したような天気といえる。ガラス戸とは眼と鼻の先ほんの一メートル足らずのところにコンクリート・ブロックを積みあげただけの門がある。まったく馴染みのない屋外の空気の中を切り開き押し進むようにして彼は門を出た。幅の狭い舗装道路の両側には小住宅と商店が混在しているように見えるがそれはおそらくこの地域が商店街からわずかに離れているだけの地域であることを示すためだろう。彼の家の斜め向かいにある家庭用金網製品を製造販売しているらしい小さな店では店さきの作業場に店主と思える男がうず高く積みあげた製品に囲まれてすわりこみ手を動かしている。器用に動かしているとか見えないその手で金網を加工して箒や籠や篩や洗ひ桶などを作っているのであるうとしか彼には思えない。部厚そうな作業着を着て地下足袋をはいたその男は黒くいかつい顔つきをしている癖に仕事柄そうなつたのだと言いたいのかまるで女のようにながい睫毛毛をしていて彼が門を出るとその金屑をいっぱい光らせた睫毛の下からちらと彼を覗いた。すぐに眼を伏せて仕事を続ける男の方へ彼は歩き出そうとした。自分の家の玄関付近で何があったのかを男に訊ねるつもりだったのだが男はすでに男と男の仕事に関係のある事柄以外は何ものも寄せつけぬ態勢に入ってしまった。しかしおれは他

人の質問に答える為にだけここでこうして金網を加工していたのではないという男の全身の主張がすでに男の目撃したある事件の存在を証明しているのだ。歩き出した彼は道路の中ほどで自分のそれとは相容れぬらしい男の環境にぶつかった。それは粘液質だったがフォース・バリヤーもかくやと思えるほどの強靱さである。彼自身のものとはまったく異なるらしい男の行為の主題が男のフィードの存在を主張している。自分の力場がそれほど微弱なものとは思ってないなかった彼はまた怒りを覚える。この男はたとえちらとでも自分を一瞥した以上自分の必要に応じて自分の場に包含されるべきであり自分の質問に答えなければならぬ筈なのだと思ふ。電話が鳴った。男は前掛けを振って膝の上の金網や金屑を払うと喜びの表情を浮かべて立ちあがる。その電話は店のやや奥まった帳場の机の上で今までただ金網製品を作っているだけだったその男にただそれだけにとどまらない男固有の立場とその立場の延長上にある新しく発生した事態を告げる為に鳴りはじめたのだ。彼の考えでは男はあきらかに彼の見ている前でかかってきたその電話に出ることが当然彼から受けるであろう質問を軽視できる絶好の手段だと思っているに違いなかった。男が店の奥へ退いたために男が彼の行く手に張りめぐらしていたエネルギー・スクリーンも退く。彼はその機に乗じて男が今まで働いて見せていた仕事場の前まで前進する。男は

そんな彼の行動にまったく気づかぬふりをしながらも帳場の椅子に掛けて受話器をとり重大事件にかかわりあっている自分の実践的主観性を秘密めかして主張しはじめる。

「君か。親書を手渡した時の反応は。そうか。君はそれを楽しんだのか。君も豪胆な男だな。おれの後継者になれるぞ。そこはいわば百鬼夜行の森だ。そこまで進行していればもう連中の錯覚を利用する以外なさそうだな。グラム単位で交渉しろ。倉敷料を忘れるなよ。倉敷だ。そうだ。あとはオブザーバーとしての役割に徹すればいい。おれの役割か。オブザーバーの鏡だ。猫のゆりかごの中をよく見ておけ。必ず役に立つことがある筈だ。事態は自動ピアノのように進行しつつあるが最後のクライマックスにどんな副次的な主題があらわれるかはまだわかっていない。もしかするとチャンピオンたちの朝食にタイタンの妖女がまぎれこんだりするかもしれないからな。角笛の音の響く時に世界の中心で愛を叫んだけものが死ぬだろう。なあにおれの予言は人為的可変性を持つているから心配することはない。ああそうだ。そうだと。大立物的可変性と言い換えてもいいぞ。大立物であるが故にかえってその言動が不安定なままになっている。よくあることだ。だから今のところ何をやっても唐突ではない。理由を太陽のせいにしたりするのはもはや陳腐だがそれ以外の理由とならうにでもくつつけることが可能だ。だから今のうちに逆転を用意してお

いた方がいい。明日来るやつと喧嘩しろ。なんだと。明日来るのが弟であっても別段かまわんだらうが。その弟と喧嘩しろ。何。いくら仲が良いことになっていても喧嘩する時には喧嘩するものだ。じゃ女房どものせいにして。せっかく仲の良かった男兄弟がかみさん同士の仲の悪さが原因で喧嘩してしまうというのはざらにある話だ。同伴者文学としては恰好のサブ・テーマだ。アクチュアリティがある。フォニイにはならないよ。いやいや。その状態で余計なことを混入させてはいけない。導入する価値のある人物なら別だがね。しかし人間が多いからといって広がりや興行きが出るとは限らないよ。そうだ。気をつけてやることだ。まあ君の技量なら。待てよ。この字はいけない。伎倆にしよう。頼んだぜ」

男は勢いよく受話器を置いた。今まで受話器に向かって喋っていた内容がまだ周囲に残っていて自分はその影響を受け続けているのだといわんばかりに立ちあがり男は仕事に戻ろうとする。店さきに立っている彼を故意に無視しようとする男の気持が彼には推察できる。男は今の電話で自分がいかに自身の問題の重要な局面に立たされていてそれへのめりこんでいるかが理解できた筈なのにまだ質問しようとして自分を待ち構えている彼に対し心外そうな表情をして見せたがその表情は決して彼に向けようとはしなかったからだ。その実すぐ横に立っている彼のことで心がいつ